独立記号素における非自律性

動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素

La non-autonomie dans les monèmes indépendants

Les monèmes verbaux, les monèmes propositionnels et les monèmes interjectionnels

川島　浩一郎
KAWASHIMA Koichiro
福岡大学
Université de Fukuoka
E-mail: k-kawa@cis.fukuoka-u.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.41-60.
原稿受理 2020-11-30 ; 最終版 2021-02-10

抄録
動詞記号素や命題的記号素は、それを自律化することもできれば、非自律化することもできる。間投詞記号素は、それを自律化することもできなければ、非自律化することもできない。いずれにせよ、これらは、自律的であるか非自律的であるかという弁別が意味をなさない独立記号素である。これらの独立記号素を述辞とする文においては、表意単位が独立的であるには、それが自律的な表意単位でないことが必要である。この原理は、述辞が独立記号素でない文においても観察されることがある。

Summary (Résumé)
Le monème verbal et le monème propositionnel sont indépendants, non seulement autonomisables mais aussi dé-autonomisables. Le monème interjectionnel est un monème indépendant qu'on ne peut ni autonomiser ni dé-autonomiser. Ces monèmes sont donc non-autonomes. Dans la phrase dont le prédicat est un monème indépendant, pour que les unités significatives soient indépendantes il faut qu'elles soient non-autonomes. Cette logique s'observe également dans d'autres types de phrases.

キーワード：従属、独立、自律、非自律、名詞文

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.41–60.
183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-cho Fuchu City, Tokyo
本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/ licenses/by/4.0/deed.ja

0. はじめに

文の述辞として、独立記号素の実現形が用いられることがある。独立記号素は、文脈の影響がないかぎり、実現形が独立的 (非従属的) であることを含意した表意単位である。つまり独立記号素の実現形は、統辞的に、他の表意単位の実現形の存在を前提にすることなく現れることができる。独立記号素には、動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素がある。たとえば (1) の arrive は、動詞記号素の実現形である。(2) の non は、命題的記号素の実現形である[1]。命題的記号素の主な実現形としては、oui、si、non がある。(3) の pardon は、間投詞記号素の実現形である[2]。(1) の arrive、(2) の non、(3) の pardon は、いずれも、文の述辞であると言ってよい。

(1) Ma femme *arrive*. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.99)
(2) — C'est ce que tu as choisi ? — *Non*. (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.167)
(3) Pardon. (Andréa H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.291)
(4) Elle me reconnaît. *Moi pas*. (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.38)
(5) Le night-clubbing est ici devenu un produit de consommation de masse. *Après le Capitalisme, le Clubbisme!* (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.189)

文の述辞は、独立記号素の実現形でないこともある。たとえば (4) の moi pas や (5) の après le Capitalisme, le Clubbisme は、独立記号素の実現形を述辞としてはいない。ただし、これらが文であることにかわりはない。文は、統辞的に、その全体が独立的なステイタスを備えた実現形である。(4) の moi pas や (5) の après le Capitalisme, le Clubbisme は、統辞的に、他の表意単位の実現形から独立している (従属していない) と考えてよい。

本稿では、主に、独立記号素が含意する独立性と非自律性の関連について考察する。動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素の間にみられる共通点と相違点にも言及する。自律という用語は、統辞機能が表示された状態を意味する。統辞機能という用語は、大略、第一次分節の結果として現れた表意単位の間にある関係性を指す。

独立記号素の実現形を述辞とする文においては、独立的な実現形であることは「自律的ではない」実現形であることの十分条件である。よって「自律的ではない」実現形であることは、独立的な実現形であることの必要条件である。独立性と非自律性の間に認められるこの関係は、独立記号素の実現形を述辞としない文においても観察される。

---

[1] MARTINET (1979). *La grammaire fonctionnelle du français* : 147
[2] 例文に現れた表意単位の「実現形」に言及する際 (いわゆる引用でない場合) には、大文字と小文字の区別やピリオドの有無などを、例文に現れた通りの形で表記するとはかぎらない。

1. 文における従属と独立

1.1. 従属性の統辞的な定義

複数の表意単位の実現形が発話において担う統辞的なステイタスが、同等であるとはかぎらない。表意単位には、記号素 (最小の表意単位) や連辞 (複数の記号素の複合体) がある。たとえば (6) の gris clair と (7) の gris pâle は、どちらも、ある色調を帯びた灰色である。つまり gris clair や gris pâle において中心的なステイタスを担うのは、gris という実現形である。一方 clair や pâle が担うステイタスは、いずれも、gris に対して付随的だと言える。また (8) の bleu pâle と (9) の bleu girs は、ある色調を帯びた青色である。つまり bleu pâle と bleu gris において中心的なのは、bleu である。つまり (9) の bleu gris における gris は、bleu に対して付随的である。

(6) Elle porte un tailleur *gris clair*, [...]. (Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.243)
(7) Sa croix en or se détachait sur son chemisier *gris pâle*. (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.208)
(8) L'appartement était plein d'une lumière *bleu pâle*. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.372)
(9) Le regard *bleu gris* la détailla, [...]. (Andréa H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.160)

表意単位の実現形が文中に現れるとき、その出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にしていることがある。たとえば (8) の une lumière bleu pâle において、une と bleu pâle の出現は、lumière の存在を前提にしている。実際 (8) の une lumière bleu pâle から lumière を除去すれば、それにともなって、une や bleu pâle もまた (8) から姿を消すことになる。同様に (8) の bleu pâle から bleu を除去すれば、それにともなって pâle も、この文における存在理由を失う。

表意単位の実現形の出現が、他の表意単位の実現形の存在を前提にするとき、前者は後者に従属すると言われる。このタイプの関係は、依存あるいは限定と呼んでもよい[3]。この関係では、前者が中心的であるのに対して、後者は付随的である。たとえば (9) の le regard bleu gris において、le と bleu gris は regard に従属する。つまり le regard bleu gris において、regard が中心的であるのに対して、le や bleu gris は付随的である。実際 (9) から regard を除去すれば、le や bleu gris と la détailla の間の統辞関係に本質的な影響が生じ、その結果、le や bleu gris は (9) において存在意義を失うことになる。一方 (9) から le や bleu gris を除去しても、regard が détailla の主辞 (あるいは主辞の中心部分)

[3] 本稿で使用する重要な用語や概念には、できるだけ説明を加える。人文科学の用語や概念が、いつも同じ意味で理解されているとはかぎらないからである。

であるという統辞関係に、本質的な影響は生じない。(9) の regard が担う主辞 (あるいは主辞の中心部分) としてのステイタスは、le や bleu gris の存在に依拠するのではなく、détailla との統辞関係に立脚する。実際 (9) から détailla を除去すれば、regard が担う主辞 (あるいは主辞の中心部分) としてのステイタスは失われる。しかし (9) から le や bleu gris を除去しても、regard と détailla の間の統辞関係に変化が生じるわけではない。

1.2. 独立性の統辞的な定義

表意単位の実現形の出現が他の表意単位の実現形の存在を前提にしないとき、統辞的な観点から、前者の実現形は独立的だと言われる。たとえば (10) の attends は、独立的な実現形だと言える。(10) における attends の出現は、他の表意単位の実現形の存在に従属してはいない (1.1.を参照)。独立的である点は (11) の oui や merci、(12) の gaffe も同様である。これらの実現形の出現は、他の表意単位の実現形の存在に依存していない。

(10) *Attends*. Je ne peux pas vivre avec toi. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p74.
(11) — Je le mets sur la note de ta mère ? — *Oui*. *Merci*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.51)
(12) *Gaffe*. Il arrive. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.320)

ようするに、統辞的な独立は、統辞的な非従属であると考えてよい。言い換えれば、独立的な実現形は非従属的な実現形である (1.1.を参照)。非従属的な実現形は、独立的な実現形である。そして従属的な実現形は、非独立的な実現形である。

1.3. 文における独立性

1.3.1. 文の定義

表意単位の実現形全体が他の表意単位の実現形から統辞的に独立した実現形であるとき、その実現形全体を文と呼ぶことができる。たとえば (13) の tu sors や oui、(14) の j'ai faim は、他の表意単位の実現形に従属していない (1.1.を参照)。つまり、他の表意単位の実現形から独立している (1.2.を参照)。よって、これらの実現形を、文として認定することができる。他の表意単位の実現形に従属しない実現形を文として認定しないのであれば、文という概念そのものが無意味になってしまう。

(13) — Tu sors ? — *Oui*. (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.149)

(14)　J'ai faim. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.184)
(15)　J'avoue que *oui*. (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.288)
(16)　Je crois que *j'ai faim*, [...]. (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.151)

表意単位の実現形が文と呼ばれる実現形であれば、その実現形の全体は、他の表意単位の実現形から統辞的に独立した実現形である。たとえば (13) の tu sors や oui は、文であると考えてよい。これらの実現形は、全体として、他の表意単位の実現形に (統辞的に) 従属していない。

よって文という単位は、他の表意単位の実現形から統辞的に独立した表意単位の実現形全体として定義することができる。全体が他の表意単位の実現形から独立していることは、ある表意単位の実現形が文であるための必要十分条件だからである。表意単位の実現形が全体として他の表意単位の実現形から独立した実現形であるとき、その実現形全体は文である。そして表意単位の実現形が文と呼ばれる実現形であれば、その実現形の全体は、他の表意単位の実現形から独立した実現形である。たとえば (13) の oui や (14) の j'ai faim は、文であると認定してよい。これらの実現形が、他の表意単位の実現形から独立した実現形だからである。

他方、他の表意単位の実現形に統辞的に従属している実現形を、文とみなすことはできない。非独立的な実現形は、文ではありえないからである。たとえば (15) における oui は、(13) の oui とは異なり、文ではない。(15) における oui は、従属的な (非独立的な) 実現形である。実際 (15) から avoue を除去すれば、je と que oui の間の統辞関係に本質的な影響が生じる。その結果、je や que oui は (15) における存在意義を失うことになる。そして (15) における que oui が従属的な実現形であれば、その一部分である oui もまた従属的な実現形である。なお、文と同じ実現形を備えながら発話の一部分となっている表意単位の実現形は、文ではなく、従属節と呼ばれる。つまり (16) における j'ai faim は、(14) の j'ai faim のような文ではなく、従属節である。

> A un point de vue purement linguistique, et abstraction faite de toute considération de logique ou de psychologie, la phrase peut être définie : un ensemble d'articulations liées entre elles par certains rapports grammaticaux et qui, ne dépendant grammaticalement d'aucun autre ensemble, se suffisent à elles-mêmes.[4]

> It is evident that the sentences in any utterance are marked off by the mere fact that each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form.[5]

---

[4] MEILLET (1903). *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes* : 326
[5] BLOOMFIELD (1933). *Language* : 170

以上の考察から、文という単位を、他の表意単位の実現形から統辞的に独立した表意単位の実現形として定義することができる。なお、この文の定義は、上に引用した Meillet (1903) や Bloomfield (1933) による文の定義と、本質的には同一の定義だと言ってよい。Meillet (1903) や Bloomfield (1933) における文の定義は、本質的に、独立性ないしは非従属性という概念に基づいている。

(17) Je me suis dit, c'est bizarre. (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.69)
(18) Tu vois, tu recommences ! (Marc Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.295)

統辞的に独立した表意単位の実現形とそうでない実現形の境界が、必ずしも明確であるとはかぎらない。ある実現形が「一つの独立した実現形」であるのか「複数の独立した実現形」であるのかの判定には、事例によっては、解釈が必要である。たとえば (17) の je me suis dit, c'est bizarre が「一つの独立した実現形」であるのか、それとも「二つの独立した実現形」(je me suis dit と c'est bizarre) の並置であるのかは、解釈や考え方にもよる。

ただし、ある表意単位の実現形の全体が統辞的に独立した実現形であれば、それは文であるという点にかわりはない。たとえば (18) の tu vois, tu recommences を「一つの統辞的に独立した実現形」とみなすのであれば、tu vois, tu recommences 全体が一つの文であることになる。この tu vois, tu recommences を「二つの独立した実現形」(tu vois と tu recommences) の並置とみなすのであれば、そこには二つの文が含まれることになる。

よって独立的な実現形であるのか非独立的な実現形であるのかが明確に判別できない事例があるとしても、独立性概念に基づいた文の定義が無意味になるわけではない。実際、独立的な実現形であるのか非独立的な実現形であるのかが明確に判別できるような事例も、ごく普通に存在する。定義にあてはまるかどうかを判別できない事例があるとしても、それは (少なくとも) 定義に反する事例ではない。「真」なのか「偽」なのかを明確に判定できない事例があるとしても、真や偽という概念が無意味になるわけではないのである。

1.3.2. 文における独立的な実現形の存在

従属的な表意単位の実現形からのみ構成される実現形の全体は、従属的 (非独立的) な実現形である。X、Y、Z をそれぞれ、表意単位の実現形を表す記号だとしよう。XYZ という実現形に含まれる X、Y、Z がすべて従属的な実現形だとすれば、それらの全体である XYZ もまた従属的な実現形である。たとえば (19) において、une と blanche は robe に従属する (1.1.を参照)。この une robe blanche から robe を除去すれば、une と blanche は (19) における存在理由を失う。また (19) における robe は、porte に従属する。(19) から porte を除去すれば、robe は直接目的辞であるという (19) における存在意義を失うことになる。よって (19) における une robe blanche は、全体として、従属的な実現形であるとみなしてかまわない。この une robe blanche の内部に、非従属的 (独立的)

な実現形が含まれていないからである。

(19)　Camille *porte une robe blanche*, [...]. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.85)
(20)　Merci ! (Marc Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, p.296)
(21)　Merci de la confiance. (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.92)

そこに含まれるすべての表意単位の実現形が従属的であるような実現形の全体は、文ではありえない。このような実現形は、全体として、従属的な実現形でしかないからである。文という用語は、他の表意単位の実現形から統辞的に独立した表意単位の実現形の全体を意味する (1.3.1.を参照)。たとえば (19) における une robe blanche を、文として認定することはできない。この une robe blanche は、文ではなく、文の一部分にすぎない。全体として、内部に独立的な実現形が含まれていない、従属的な実現形だからである。

したがって文の全体あるいは一部分は、必然的に、独立的な実現形である。文の内部には、必ず、他の表意単位の実現形に従属しない実現形が含まれる (1.2.を参照)。内部に独立的 (非従属的) な実現形が含まれていない実現形は、独立的な実現形ではないからである。たとえば (20) における merci は、これ全体が独立的な実現形である。一方 (21) の merci de la confiance もまた、全体が独立的な実現形である。ただし、この文に含まれるすべての表意単位の実現形が独立的であるわけではない。(21) の de la confiance は、merci に従属する非独立的な実現形である。よって (21) の merci de la confiance 全体が独立的でありえているのは、この実現形の一部分 (merci) が独立的な実現形であるからだと考えざるをえない。

一つの文の内部に含まれる表意単位の独立的な実現形は、一つだけであると言ってよい。つまり独立的な実現形が複数あれば、文が複数あることになる。一つの文の内部に、仮に複数の独立的な実現形が含まれているとしたら、一つの文の内部に複数の文があるという矛盾が生じてしまうことになる。なお、従属節は文ではない (1.3.1.を参照)。

(22)　Plus je bois, plus je deviens lucide. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.167)
(23)　Ronde vous êtes, ronde vous resterez. (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.63)

文である実現形とそうでない実現形の境界が、必ずしも明確であるとはかぎらない。独立的な実現形と非独立的な実現形の境界が、必ずしも明確とはかぎらないからである (1.3.1.を参照)。ただし、一つの文に含まれる独立的な実現形が一つだけである点にかわりはない。たとえば (22) における文は一つであると解釈すれば、そこに含まれる独立的な実現形も一つである (おそらく、je bois と je deviens の両方を含んだ連辞の全体)。また

(23) における文は二つであると解釈すれば、そこに含まれる独立的な実現形も二つである (vous êtes を中心とする連辞と vous resterez を中心とする連辞)。

以上より、一つの文の内部には表意単位の独立的な実現形が、一つ、かつ一つだけ含まれると考えられる。独立的な実現形は、非従属的な実現形と考えてよい (1.1.と 1.2.を参照)。独立的な実現形であるためには、そこに少なくとも一つの独立的な実現形が (全体として、あるいは、部分として) 含まれている必要がある。独立的な実現形を含まない実現形は、全体として非独立的な実現形だからである。非独立的な実現形は、文ではありえない (1.3.1.を参照)。また一つの文であるためには、そこに含まれる独立的な実現形は一つだけである必要がある。

文に含まれる一つ、かつ一つだけの独立的な実現形は、その文の述辞と呼ばれる。述辞は、表意単位の独立的かつ最小の実現形である。文に含まれる述辞以外の実現形は、いずれも従属的 (非独立的) であると言ってよい。

1.3.3. 独立記号素 : 動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素

実現形が独立的であることを含意した記号素を、独立記号素と呼ぶ。独立記号素には、動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素がある[6]。命題的記号素は、主に oui、si、non を実現形とする表意単位である。独立記号素の実現形が (文脈の影響がないかぎり) 独立的でありうることは、独立記号素が備えた性質として想定されている。

(24) *Oublie*, je peux me tromper. (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.118)
(25) Euphorique, telle *une Robinsonne rencontrant sa Vendredine*, je lui ouvre aussitôt. (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.97)
(26) Je trouve qu'*elle grandit trop vite*. (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p.187)

動詞記号素は、独立記号素である。動詞記号素は、その実現形が他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる表意単位である (1.2.を参照)。実際 (24) の oublie には、少なくとも音声的に、[ubli] という動詞形の語幹 (つまり動詞記号素の実現形) しか含まれていない。この [ubli] の出現は、他の実現形の存在を前提にしない。

ただし動詞記号素の実現形が、独立的な実現形として現れるとはかぎらない。たとえば (25) における rencontrant には、動詞記号素の実現形が含まれる。この実現形は、独立的ではない。Robinsonne に従属する実現形 (rencontrant sa Vendredine) の、一部分だからである。また (26) の grandit には、動詞記号素の実現形が含まれる。この実現形を含む elle grandit trop vite は、文ではなく従属節である (1.3.1.を参照)。よって (26) の

[6] MARTINET, A. (1979). *La grammaire fonctionnelle du français.*

elle grandit trop vite に含まれる動詞記号素の実現形は、独立的ではない。

(27)　Non, merci ! (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.171)
(28)　Ça *non* ! (Françoise Dorin, *En avant toutes !*, Collection Pocket, 2007, p.82)
(29)　Je vous jure que *non*. (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.464)
(30)　La police vous dit *merci*. (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.104)

命題的記号素および間投詞記号素は、独立記号素である。これらは、その実現形が他の表意単位の実現形に従属する必要なしに現れることができる表意単位である。たとえば (27) の non や merci、(28) の non の出現は、他の表意単位の実現形の存在を前提にしていない。

ただし命題的記号素や間投詞記号素の実現形が、独立的な実現形として現れるとはかぎらない。たとえば (29) における non は、命題的記号素の実現形と考えてよい。この non は、独立的ではない。文ではなく、従属節だからである。(30) の merci は、独立的ではない。(30) の merci は、直接目的辞として dit に従属する。

2. 自律性概念について

2.1. 音声における線状性

線状性を備えた対象は、次の性質 (i) と性質 (ii) を兼ね備えた対象である。性質 (i) 一方向的な順序にしたがって展開する。性質 (ii) 複数の要素が同時に現れない。

言語が音声として実現する場合、その実現形は線状性をもたざるをえない。音声は、時間軸に沿って継起的に展開する。よって言語の音声的な実現形は、性質 (i) を備えている。また人類の身体構造がもつ発声器官が一つであるため、複数の音声を同時に自由に発信することはできない。よって言語の音声的な実現形は、性質 (ii) を備えている。音声には、線状性という制約があると言ってよい。

言語の音声的な実現形では、音声を発信する順序を選択することができる。音声は時間軸に沿って継起的に展開するからである。たとえば [i] と [l] は、[il] という順序で発信することもできれば、[li] という順序で発信することもできる。このような発信順序の選択を、連辞的選択と呼ぶ。

言語の音声的な実現形においては、複数の音声を選択肢とし、その選択肢から一つを選んで発信することができる。複数の音声を、同時に自由に発信することはできない。たとえば [wa] の前という環境での音声の選択肢から [p] を選択することもできれば (つまり [pwa])、同じ環境で [b] を選択することもできる (つまり [bwa])。このような同一文脈にある選択肢からの選択を、範列的選択と呼ぶ。

言語の音声的な実現形において可能な操作は、つまるところ、上記の連辞的選択と範列的選択しかない。音声的な実現形には、線状性という制約があるからである。なお「音声的な実現形」という概念には、音声的な実現形を文字として転写したものも含まれるとする (ただし、文字の使用には線状性を逸脱するものもありうる)。

2.2. 統辞機能の表示方法 : 位置、機能辞、含意

2.2.1. 統辞機能と自律性

統辞機能が表示された状態にある表意単位の実現形は、自律的であると言われる。たとえば (31) における tu や toujours そして Puccini は、自律的な実現形である。実際 (31) においては、tu が主辞であることや Puccini が直接目的辞であること、そして toujours が動詞記号素の実現形に従属する実現形であることが、何らかの方法によって表示されているはずである。さもなければ、(31) の tu や toujours や Puccini の統辞機能は不明であるということになってしまう。つまり、相互理解の成立を保証できない発話となってしまう。

(31) *Tu* aimes *toujours Puccini* ? (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.383)
(32) J'ai un cadeau *pour toi* ! (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.254)

自律的な実現形には、その内部に、自律的でない実現形が含まれることもある。たとえば (32) の pour toi は、自律的な実現形であると言ってよい。ただし、この pour toi に含まれる toi は、自律的な実現形ではない。実際 (32) において pour を除去すれば (j'ai un cadeau … toi)、toi は統辞機能が表示されていない状態になる。つまり (32) における pour の存在は、toi を自律的な実現形 (pour toi) の一部分に組み込んでいると考えてよい。言い換えれば (32) において pour は、toi を自律化している (2.2.5.を参照)。

表意単位の実現形が担う統辞機能を表示する基本的な方法は、三種類ある。位置の利用、機能辞の使用、表意単位に備わった含意の利用の三つ (あるいは、これらの組み合わせ) である[7]。統辞機能を表示する基本的な方法は、この三種類にかぎられる。言語の音声的な実現形には、線状性という制約があるからである。言語の音声的な実現形において可能な操作は、連辞的選択と範列的選択しかない (2.1.を参照)。統辞的な操作としては、つまるところ、複数の表意単位からなる選択肢から (たとえば機能辞などの) 表意単位を選択することと、それらの実現形を提示する順序を選択すること (あるいは、この二種類の選択を組み合わせること) しかできない。

[7] MARTINET, A. (1979). *La grammaire fonctionnelle du français.*

2.2.2. 位置の利用による統辞機能の表示

統辞機能は、表意単位の実現形が配置される位置によって表示されることがある。たとえば (33) の Bertha が直接目的辞であることは、主辞である Mary との相対的な位置関係によって表示されている。Bertha や Mary という実現形に、統辞機能が含意されているわけではない。Bertha や Mary を実現形とする表意単位に、統辞機能が含意されているわけでもない。実際 (33) において Bertha と Mary の位置を入れ換えれば、Bertha が主辞に、そして Mary が直接目的辞になる。(33) の Bertha は、それ自身では、自律的な実現形ではない。よって Bertha を実現形とする表意単位も、自律的な表意単位ではない。(33) の Bertha は、位置という情報と結びつくことによって、自律的な実現形 (直接目的辞であることが表示された実現形) というステイタスを獲得していると考えられる。

(33) *Mary* aborde *Bertha*. (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.217)

位置の利用は、連辞的選択と呼ばれる操作に相当する。連辞的選択という用語は、音声を発信する順序の選択を意味する (2.1.を参照)。たとえば (33) において、Bertha という実現形を aborde の前に配置するか後に配置するかという操作は、連辞的な選択であるとみなしてよい。

2.2.3. 機能辞の使用による統辞機能の表示

統辞機能は、機能辞の使用によって表示されることがある。機能辞という用語は、他の表意単位の実現形の統辞機能を表示するための表意単位を意味する。たとえば (34) における gentillesse の統辞機能は、avec という実現形によって表示されている。実際 (34) の gentillesse は、自律的な実現形ではない。ただし (34) の avec gentillesse は、(35) の gentiment と同様に、自律的な実現形である。つまり (34) の gentillesse は、avec をともなうことによって、自律的な実現形の一部分というステイタスを獲得していることになる。よって (34) において avec を実現形とする表意単位は、機能辞であると考えてよい。なお (36) の avec にみられるように、avec を実現形とする表意単位が常に機能辞であるわけではない。

(34) Stéphanie et Laurence viennent vous embrasser *avec gentillesse*. (Nicole de Buron, *Qui c'est, ce garçon ?*, Collection J'ai lu, 1985, p.8)
(35) Juliette secoua la tête *gentiment*. (Maxime Chattam, *L'âme du mal*, Collection Pocket, 2002, p.22)
(36) On fait quoi *avec* ? (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.234)

機能辞は、他の表意単位の実現形を自律的な実現形の一部分に組み込むための表意単位でもある。たとえば (34) では avec の存在によって、gentillesse という自律的でない実現形が、avec gentillesse という自律的な実現形の一部分に組み込まれている。つまり (34) においては、avec を実現形とする機能辞が gentilless を自律化していると考えられる (2.2.5.を参照)。

機能辞の利用は、範列的選択と呼ばれる操作に相当する。範列的選択という用語は、同一文脈にある複数の選択肢から一つを選んで発信する操作を意味する (2.1.を参照)。たとえば (34) において、gentillesse の前で avec という実現形を使用するかしないかという操作は、範列的選択であると考えてよい。

2.2.4. 表意単位が備えた含意の利用による統辞機能の表示

統辞機能は、選択された表意単位そのものの含意によって表示されることがある。たとえば (37) の je が主辞であることや me が目的辞であることは、これらを実現形とする表意単位に含意されている。そして (37) の me が直接目的辞であることは、comprends を実現形とする表意単位の含意によって表示される。実際 (37) の je が主辞であることや me が直接目的辞であることは、(38) や (39) の moi とは異なり、位置の利用や機能辞の使用によって表示されているわけではない。つまり (37) の je や me が自律的な実現形であるのは、これらを実現形とする表意単位が自律的な表意単位だからにほかならない。

(37) Je me comprends. (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.22)
(38) Il a *moi*. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.49)
(39) Il faut faire attention *avec moi*. (*Elle*, 19 septembre 2005, p.108)

表意単位の含意の利用は、範列的選択と呼ばれる操作に相当する。たとえば (37) における je や me を実現形とする表意単位の出現は、範列的選択の結果である。つまり表意単位の含意の利用は、自律的な表意単位を選択することによって、統辞機能を表示することだと言ってよい。

2.2.5. 表意単位の実現形における自律化と非自律化

何らかの統辞的な操作によって表意単位の実現形が自律的な状態にある場合、その操作を「自律化」と呼ぶ。たとえば (40) の chez Catherine は、自律的な実現形であると言ってよい。(40) における chez Catherine が自律的であるのは、直接的には、機能辞の実現形である chez の存在による (2.2.3.を参照)。実際 (40) から chez を除去した残りの部分 (Elle va ... Catherine) だけでは、Catherine の統辞的な役割は不明確である。つまり (40) における Catherine は、chez の存在によって自律化されていることになる。

(40)　Elle va *chez Catherine*. (Nicole de Buron, *Vas-y maman*, Collection J'ai lu, 1978, p.89)
(41)　Le lendemain, Rigolo est *chez elle*. (Françoise Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.39)

自律化という統辞的操作は、表意単位の実現形を、自律的な実現形の内部に組み入れることでもある。たとえば (40) の Catherine は、chez の存在によって、chez Catherine という自律的な実現形の内部に組み込まれていると言ってよい。

何らかの統辞的な操作によって表意単位の実現形が非自律的な状態にある場合、その操作を「非自律化」と呼ぶ。たとえば (41) における chez elle は、(40) の chez Catherine とは異なり、非自律的な実現形である。この chez elle は、Rigolo est ...の属詞の位置に配置されるという統辞的な操作によって、自律的な状態にある。つまり (41) の chez elle が属詞の位置にあるという情報を考慮に入れなければ、この chez elle という実現形そのものは、自律的な実現形ではないことになる。よって (41) の chez elle 自体は、非自律化されていると考えられる。ようするに (41) の chez elle においては、chez elle の非自律化と、属詞の位置に配置するという統辞的な操作による chez elle の自律化が同時に成立していることになる。

非自律化という統辞的操作は、表意単位の実現形を、非自律的な実現形の内部に組み入れることでもある。たとえば (41) の chez elle は、属詞の位置に配置されるという統辞的な操作によって、非自律的な実現形 (つまり chez elle それ自身) の内部に組み込まれていると言ってよい。

2.3. 独立記号素における独立性と自律性

2.3.1. 動詞記号素における独立性と非自律性

動詞記号素は、独立記号素である。独立記号素は、実現形が独立的であることを含意した表意単位である (1.3.3.を参照)。

(42)　C'est seulement quand j'ai tourné la clé de ma porte que j'ai entendu *les pas* sourds et rapides *venant de la cage d'escalier*. (Tonino Benacquista, *La commedia des ratés*, Collection Folio, 1991, p.207)
(43)　Les gens *venus pour la soirée culturelle* étaient partis plus tôt que prévu. (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.58)
(44)　Il prétend que par bateau, *en venant d'Angleterre*, les contrôles sont moins risqués. (Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.372)

動詞記号素の実現形は、現在分詞記号素や過去分詞記号素、ジェロンディフ記号素の実現形を使用することによって、自律的な実現形の一部分に組み込むことができる

(2.2.5.を参照)。つまり動詞記号素の実現形は、自律化することができる[8]。動詞記号素と現在分詞記号素の実現形を含んだ (42) の venant は、pas に従属する (pas を限定する) という統辞機能が表示された状態にあるという意味で、自律的な実現形である (2.2.を参照)。動詞記号素と過去分詞記号素の実現形を含んだ (43) の venus は、gens に従属する (gens を限定する) という統辞機能が表示された状態にあるという意味で、自律的な実現形である。動詞記号素とジェロンディフ記号素の実現形を含んだ (44) の en venant もまた、統辞機能が表示された状態にあるという点で、自律的な実現形である[9]。動詞記号素は、その実現形を自律化する可能性を備えた表意単位である。

(45) *Aimer* est parfois aussi pétrilleux que *haïr*. (Bernard Werber, *L'Encyclopédie du savoir relatif et absolu*, Collection Le Livre de Poche, 2000, p.51)
(46) Je suis venu *boire* un café. (Anna Gavalda, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.471)
(47) Elle se redressa avec difficulté et parvint à émettre un faible « *Attendez !* » d'une voix rauque. (Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.143)

動詞記号素の実現形は、不定詞記号素の実現形を使用することによって、自律的でない実現形の一部分に組み込むことができる。上に述べたように、自律的な実現形の一部分に組み込むこともできる。たとえば、動詞記号素と不定詞記号素の実現形を含んだ (45) の aimer や haïr は、位置や機能辞の利用がなければ、自律的な実現形ではない (2.2.を参照)。つまり (45) の aimer や haïr において、動詞記号素の実現形は、非自律化されていると考えてよい。他方、動詞記号素と不定詞記号素の実現形を含んだ (46) の boire は、位置や機能辞の利用を必要としない自律的な実現形である。つまり動詞記号素は、その実現形を自律化する可能性と非自律化する可能性を兼ね備えた表意単位である。なお (47) の un faible « Attendez ! » にみられるのは、動詞記号素の実現形の (名詞限定辞記号素の実現形を伴った) 名詞化あるいは引用であって、非自律化ではないと思われる。(47) の attendez にみられるのは、動詞記号素の実現形の概念的な名詞化であって、統辞的な操作ではない。(47) の attendez には、動詞記号素の実現形が含まれていると解釈する必要がもはやないと考えてよい。

以上の考察より、動詞記号素は自律的な表意単位でもなければ非自律的な表意単位でもないと推論することができる。動詞記号素は、その実現形を自律化する可能性と非自律化する可能性を兼ね備えた表意単位だからである。その意味において、動詞記号素は、自律性と非自律性の弁別をもたない独立記号素である。

2.3.2. 命題的記号素における独立性と非自律性

命題的記号素は、独立記号素である。独立記号素という用語は、実現形が独立的

[8] 川島浩一郎 (2013)「非動詞化記号素における対立」: 13-30
[9] 川島浩一郎 (2019)「ジェロンディフ記号素の存在について」: 42-60

であることを含意した表意単位を意味する (1.3.3.を参照)。

(48) Vous, vous allez penser qu'il drague tout ce qui bouge *alors que non*. (Cécile Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.106)
(49) Oui, mais elle est mariée, *alors que moi, non* ! (Agnès Abécassis, *Toubib or not toubib*, Collection Le Livre de Poche, 2008, p.226)
(50) Si mister météo dort *pendant que moi non*, je vais finir par avoir sérieusement le bourdon. (Sylvie Testud, *Il n'y a pas beaucoup d'étoiles ce soir*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.52)

命題的記号素の実現形は、機能辞を使用することによって、自律的な実現形の一部分に組み込むことができる。つまり命題的記号素の実現形は、自律化することができる (2.2.5.を参照)。命題的記号素の実現形は、従属節として機能しうるからである。たとえば (48) や (49) では alors que の使用によって、(50) では pendant que の使用によって命題的記号素の実現形が自律化されている。

(51) C'est possible *que oui*, c'est possible *que non*. (Fred Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.81)
(52) — On ne trouvera pas ce caillou. — Il dit *que si*. (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.106)
(53) C'est oui ou c'est non ? (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.84)
(54) Lartigues balbuita *un oui très faible*. (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.186)

命題的記号素の実現形は、非自律的な実現形の一部分に組み込むことができる。つまり命題的記号素の実現形は、非自律化することができる。たとえば (51) にみられる que oui や que non、(52) にみられる que si は自律的な実現形ではない。(53) の c'est oui や c'est non も、自律的な実現形ではない。これらの実現形は、統辞機能の表示をともなっていない。なお (54) の un oui très faible にみられるのは、命題的記号素の実現形の (名詞限定辞記号素の実現形を伴った) 名詞化であって、非自律化ではないと思われる。命題的記号素の実現形としての oui と (54) の oui にみられるのは、表意単位の多義性や多機能性であって、統辞的な操作ではないからである。少なくとも、名詞記号素の実現形として扱われた (54) の oui を、命題的記号素の実現形として解釈する必然性はない[10]。

以上の考察より、命題的記号素は自律的な表意単位でもなければ非自律的な表意

[10] 同じ実現形だからといって、同じ表意単位の実現形であるとはかぎらない。同一文脈で入れ換えることのできない複数の表意単位の実現形を、同一の表意単位の実現形とみなす必然性はない。川島浩一郎 (2020)「フランス語研究における同一視と弁別」: 27-42

単位でもないと推論することができる。命題的記号素は、その実現形を自律化する可能性と非自律化する可能性を兼ね備えた表意単位だからである。命題的記号素は、その意味において、自律性と非自律性の弁別をもたない独立記号素である。

2.3.3. 間投詞記号素における独立性と非自律性

間投詞記号素は、独立記号素である。独立記号素という用語は、実現形が独立的であることを含意した表意単位を指す (1.3.3.を参照)。

(55) Au premier café du matin, on entend *le bzzzz du fax*. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.185)
(56) Tout le monde admire *le « Ah bon ! » présidentiel*. (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.346)
(57) Il émit *un petit « tss, tss » réprobateur*. (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.248)
(58) *« Je ne sais pas le faire »* signifie « je ne peux pas le faire ». (Frédéric Beigbeder, *L'Égoïste romantique*, Collection Folio, 2005, p.51)
(59) Il réessaya sans *les « . »* puis en mettant *des « / »* à la place des points. (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.201)

間投詞記号素の実現形は、自律的な実現形の一部分に組み込むことが難しい。間投詞記号素の実現形は、動詞記号素や命題的記号素の実現形とは異なり、自律的な従属節として機能しないのである[11]。間投詞記号素の実現形は、基本的に、主節にしか現れない。

間投詞記号素の実現形は、また、非自律的な実現形の一部分に組み込むことも難しい。間投詞記号素の実現形は主節にしか現れえないため、非自律的な従属節として機能しないからである。なお (55) の le bzzzz du fax、(56) の le « Ah bon ! » présidentiel、(57) の un petit « tss, tss » réprobateur などにみられるのは、間投詞記号素の実現形の (名詞限定辞記号素の実現形を伴った) 概念的な名詞化あるいは引用であって、統辞的な操作ではない。これらは名詞記号素の実現形として扱われているため、間投詞記号素の実現形として解釈する必然性がない。これらは、表意単位の実現形を非自律化したものではない。非自律化でない点は、(58) の« Je ne sais pas le faire »、(59) の« . »や« / » が (概念的な名詞化ではあっても) 非自律化された実現形でないのと同様である。

以上の考察より、間投詞記号素は自律的な表意単位でもなければ非自律的な表意単位でもないと推論することができる。間投詞記号素は、その実現形を自律化する可能性も非自律化する可能性も備えていない表意単位だからである。間投詞記号素は、その意味において、自律性と非自律性の弁別をもたない独立記号素であると言ってよい。

---

[11] 川島浩一郎 (2020)「間投詞的な文と非間投詞的な文 従属という概念をめぐって」: 51-70

2.4. 独立的な実現形ではない部分における従属性と自律性

一つの文の内部には表意単位の独立的な実現形が、一つ、かつ一つだけ含まれる。独立的な実現形であるためには、そこに、少なくとも一つの独立的な実現形が含まれている必要がある (1.3.2.を参照)。また一つの文であるためには、そこに含まれる独立的な実現形は一つだけである必要がある。文の内部に含まれる一つ、かつ一つだけの独立的かつ最小の実現形は、その文の述辞と呼ばれる。ようするに、一つの文には一つの述辞が含まれる。

(60) Pars pour Paris. (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.197)
(61) Vous n'étiez pas à Highgate. *Moi oui*. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.23)
(62) Pardon de vous avoir interrompu. (Andréa H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.237)

よって、文の内部にあって述辞でない部分は、すべて従属的な実現形である。たとえば (60) において述辞 (独立的かつ最小の実現形) が pars であるとすれば、pour Paris は従属的な実現形であると考えざるをえない。(61) の moi oui において独立的な実現形が oui であるとすれば、それ以外の部分 (moi) は従属的な実現形である。(62) において述辞が pardon であるとすれば、de vous avoir interrompu は従属的な実現形である。一つの文の内部における独立的な実現形は、通常、一つ (文全体、あるいは文の一部分) しかないと考えてよい (1.3.2.を参照)。

文の内部にあって独立的な実現形でない部分は、一つの自律的な実現形であるか、複数の自律的な実現形に分節できるかのどちらかである。独立的な実現形でない部分には、何らかの形で統辞機能を表示された実現形しか含まれていないはずだからである。何らかの形で統辞機能が表示されている実現形は、自律的な実現形である。たとえば (60) の pour Paris は、統辞機能が表示された自律的な実現形であるとみなしてよい。この pour Paris は、文中で何らかの統辞機能を担うために現れた実現形であるはずだからである。(61) の moi oui における moi は、oui と共起することによって自律性を与えられていると考えざるをえない。そうでなければ、この moi の統辞機能は不明確なものとなってしまう。

したがって文の内部にあって独立的な実現形でない部分は、一つの従属的かつ自律的な実現形であるか、複数の従属的かつ自律的な実現形に分節できるかの、どちらかである。たとえば (60) の pour Paris は、従属的かつ自律的な実現形である。同じく (61) の moi もまた、従属的かつ自律的な実現形であると言ってよい。

3. 文における非自律性と独立性

文の内部には、従属的かつ自律的な表意単位の実現形が現れる可能性がある。た

とえば (63) の avec lenteur は、従属的な実現形である (2.4.を参照)。この avec lenteur は、自律的な実現形でもある (2.2.3.を参照)。つまり (63) の avec lenteur は、従属的かつ自律的な実現形であると言ってよい。

(63) Comedia voyait ces images défiler *avec lenteur*. (Thierry Jonquet, *Comedia*, Collection Folio, 2005, p.305)
(64) [...], *donne*-moi un bisou. (Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.117)
(65) — Ça va comme ça, maman ? — *Oui*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.33)
(66) Bravo. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.64)

文の内部には、従属的かつ非自律的な表意単位の実現形が現れる可能性がある。たとえば (63) の lenteur は、従属的な実現形である。(63) の avec lenteur が、従属的な実現形だからである。この lenteur は (avec によって自律化されている) 非自律的な実現形でもある。つまり (63) の lenteur は、従属的かつ非自律的な実現形であると言える。

文の内部には独立的、かつ、自律的でも非自律的でもない実現形が現れる可能性がある。たとえば (64) の donne に含まれるような動詞記号素の実現形は、独立的な実現形であり、かつ、自律的でも非自律的でもない実現形だと考えられる (2.3.1.を参照)。動詞記号素の実現形は、自律化することもできれば非自律化することもできる実現形だからである。(65) の oui のような命題的記号素の実現形は、独立的な実現形であり、かつ、自律的でも非自律的でもない実現形だと考えられる (2.3.2.を参照)。命題的記号素の実現形は、自律化することもできれば非自律化することもできる実現形だからである。(66) の bravo のような間投詞記号素の実現形は、独立的な実現形であり、かつ、自律的でも非自律的でもない実現形だと考えられる (2.3.3.を参照)。間投詞記号素の実現形は、自律化することも非自律化することもできない実現形だからである。

少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文にあっては、独立的かつ自律的な実現形が現れる可能性はない。独立記号素の実現形を述辞とする文にあって独立的であるのは、独立記号素の実現形だけである (1.3.2.を参照)。そして独立記号素の実現形は、既に述べたように、自律的な実現形ではない。

少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文にあっては、独立的かつ非自律的な実現形が現れる可能性はない。独立記号素の実現形を述辞とする文にあって独立的であるのは、独立記号素の実現形だけである (1.3.2.を参照)。そして独立記号素の実現形は、上に述べたように、非自律的な実現形ではない。

したがって、少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文にあっては、ある実現形が自律的であれば、それは従属的な実現形であると考えられる。このタイプの文には、自律的かつ独立的な実現形が現れる可能性がないからである。ただし、ある実現形が従属的であっても、それが自律的な実現形であるとはかぎらない。非自律的かつ従属的な実現形が現れる可能性はある。ようするに、少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文に

おいては、自律的な実現形であることは従属的な実現形であることの十分条件である。よって、従属的な実現形であることは自律的な実現形であることの必要条件である。

このことから、少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文にあっては、ある実現形が独立的（非従属的）であれば、それは「自律的ではない」実現形であると言うことができる。独立記号素の実現形は、実のところ、自律的でもなければ非自律的でもない。すなわち、少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文においては、独立的な実現形であることは「自律的ではない」実現形であることの十分条件である。よって、「自律的ではない」実現形であることは独立的な実現形であることの必要条件である。

4. おわりに

動詞記号素、命題的記号素、間投詞記号素は独立記号素である。独立記号素という用語は、その実現形が独立的であることを含意した表意単位を意味する。命題的記号素は、主に oui、si、non を実現形とする表意単位である。

動詞記号素と命題的記号素は、自律的でもなければ非自律的でもない独立記号素である。自律性という用語は、表意単位の実現形が担う統辞機能が表示されている状態を意味する。動詞記号素と命題的記号素は、自律化することもできれば非自律化することもできる。よって動詞記号素と命題的記号素は、自律性と非自律性の弁別を備えていない表意単位だと考えられる。

間投詞記号素もまた、自律的でもなければ非自律的でもない独立記号素である。ただし間投詞記号素は、動詞記号素や命題的記号素とは異なり、自律化することも非自律化することもできない独立記号素である。間投詞記号素は、この意味において、自律性と非自律性の弁別を備えていない表意単位だと考えられる。

つまり、独立記号素においては、二種類の非自律性がみられることになる。一つは、自律化することもできれば非自律化することもできる（自律的であることと非自律的であることが両立する）という意味での非自律性である。もう一つは、自律化することも非自律化することもできない（自律的でもなければ非自律的でもない）という意味での非自律性である。いずれの場合も、自律性と非自律性の弁別が関与的でないという点にかわりはない。独立記号素は、自律性という概念領域の外側にあると言ってよい。

少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文においては、自律性と非自律性の弁別を備えていないことは、表意単位の実現形がもつ独立性と関連している。このタイプの文にあっては、ある実現形が自律的であれば、それは従属的な実現形である。したがって、ある実現形が独立的（非従属的）であれば、それは「自律的でない」実現形である。よって、少なくとも独立記号素の実現形を述辞とする文においては、独立的な実現形であることは「自律的ではない」実現形であることの十分条件である。「自律的ではない」実現形であることは、独立的な実現形であることの必要条件である。

(67)　Et Tiffany de répondre : […]. (Guillaume Musso, *Seras-tu là ?*, Collection Pocket, 2006, p.284)

(68)　Pas fou, le père. (Tonino Benacquista, *La commedia des ratés*, Collection Folio, 1991, p.56)

独立性と非自律性の間にみられるこのような関係は、独立記号素の実現形を述辞としない文においても観察されることがある。たとえば (67) の et Tiffany de répondre や (68) の pas fou, le père は、独立記号素の実現形を述辞とするタイプの文において自律性を与えることができない (少なくとも難しい) 実現形である。これらは、つまり「自律的ではない」実現形であるとみなしてよい。そして「自律的ではない」実現形であることは、独立的な実現形であることの必要条件である。したがって、独立的な実現形であることの必要条件を (独立記号素の実現形を述辞とする文において) みたしていることが、(67) や (68) が (独立記号素の実現形を述辞としない文脈において) 独立性をもった文として成立するための基盤となっていると推論することができる。

参考文献

BLOOMFIELD, L. (1933). *Language*, New York: Holt.

MEILLET, A. (1903). *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris: Hachette et Cie.

MARTINET, A. (1979). *La grammaire fonctionnelle du français*, Paris: Credif.

川島浩一郎. 2013 年.「非動詞化記号素における対立」.『ふらんぼー』38: 13-30.

川島浩一郎. 2019 年.「ジェロンディフ記号素の存在について」.『ふらんぼー』44: 42-60.

川島浩一郎. 2020 年.「間投詞的な文と非間投詞的な文　従属という概念をめぐって」.『ふらんぼー』45: 51-70.

川島浩一郎. 2020 年.「フランス語研究における同一視と弁別」.『フランス文学論集』55: 27-42.